

伊野地区自治協会新規事業概要 (H25～H27)

1 教育

(1) 伊野小学校の存続と支援

出雲市が示した伊野小学校の再編案（伊野・東・檜山小学校統合）について、「伊野小学校の再編を考える検討委員会」を設け、2年余にわたって検討した結果、伊野小学校の存続を決定した。

(2) 伊野バージョン

島根大学教育学部学生と伊野地区との連携で「伊野の自然を舞台に子どもの遊びをつくる」活動（「伊野バージョン」）を開始した。

(3) ソーシャル・ラーニング

文科省が始めたソーシャルラーニング事業を受けて、島根・鳥取の5大学の学生が伊野地区でフィールドワークを行う活動を3年間、実施している。

2 防災・危機対応

(1) 原子力災害対応

伊野地区の一部が島根原発から10km圏内にあるという地勢的特徴から、原子力災害対応訓練を毎年行っている。2014年度は、原子力災害時の避難先に指定されている出雲市大社町荒木地区への避難訓練を実施した。

(2) 土砂災害対応

土砂災害に対応するために地区災害対策本部役員会を数度にわたり開催し、課題を洗い出す作業を行うとともに組織の改編を行った。また、災害時の要支援者を支援をするため、各世帯の情報を集めデータベース化した。

(3) ファースト・レスポonder

救急車到着まで20分以上かかる当地区の救命率を高めるために、ファースト・レスポonder制度（全国で3例目）確立に向けて準備を進め、今年度中に始動する予定である。

3 農業

(1) 伊野農業の調査・研究

2013年、農業懇話会を開催し、農業者が抱える困難について話し合った。この会で出された諸課題に取り組むため、「上伊野農業再生プロジェクト」と「伊野いち」が立ち上がった。2013年、市農業支援センターが伊野地区の農業者にアンケート調査を行ったところ、離農希望者が半数を超えるなど深刻な実体が浮かび上がった。農業問題に対する取組は伊野の持続可能な発展のために最も重要な課題の1つである。

(2) 伊野いち

担い手不足など深刻な危機にある伊野農業の発展と高齢農業者のいきがい創出をめざして、産地直売所「伊野いち」を始めたところ、来客が多く、にぎわい創出に大きな貢献をしている。

(3) 中山間地の農業維持

中山間地の農業は労力と経費の両面において平地農業に比べ、大きなハンディを負っている。中山間地直接支払制度（農水省）を活用して上伊野農業再生プロジェクトが発足し、経費の軽減が可能になるとともに草刈の共同作業やホタルロードの管理など、新たな試みが始まった。

(4) 有害獣対策

上伊野農業再生プロジェクトを中心に、イノシシやシカなどによる被害を減らすために電気牧柵やワイアメッシュを張る取組が進んだ。

4 道路・河川インフラ

(1) 道路・河川の管理・改修

土木委員会が中心となって地区内の道路改修（出雲市3カ年計画）や道路周辺の伐木事業を進めた。また、市のモデル事業として伊野川上流（市河川）の河川内外に繁茂する雑木や竹の伐採事業が進んでいる。

(2) 道路建設事業

伊野地区の道路インフラ整備を推し進めるために、「伊野地区道路建設事業推進委員会」を設立した。

(3) 伊野川井堰改修

長年にわたって機能不全に陥っている伊野川の井堰（9基）改修は、防災と農業用水確保の両面から喫緊の課題であったが、H28年度から事業が開始される予定である。

5 にぎわい創出・交流人口拡大等まちづくり

(1) ホタルの里

ホタルが乱舞する伊野川上流の環境整備を事業の一環とすることで国の補助金を受けて事業を開始した「上伊野農業再生プロジェクト」にコラボする形でコミセンが「ホタル観賞会」を始めた。

(2) ひだまりカフェ

「昔なつかしい食べ物」をコンセプトに交流の場を設けようと、自治協会理事の提案で「ひだまりカフェ」が2014年から始まった。

(3) 他地域交流・国際交流・多文化共生

伊野サッカークラブが毎年、愛媛県久万高原町のサッカークラブとの交流を続けている。5年前からは伊野こみこみサロンとコミセンが在日外国人の講演会と料理教室を開始した。昨年度から、外国人の若者が伊野でボランティア活動を行う「国際ワークキャンプ」事業の準備を進め、来年度の事業実施をめざしている。

(4) ふるさとマップ

地域の魅力や情報を発信することは当地区の重要課題である。宍道湖から日本海にぬける当地区の歴史文化遺産等を一覧できる「ふるさとマップ」をコミセンが作成した。

(5) 伊野ふるさとカルタ

青少年育成協議会の発案で、ふるさとカルタづくりが始まった。まもなく完成予定で来年度から様々な活用が期待されている。

6 福祉・医療

(1) 社会福祉協議会が中心となり「伊野地区第3次福祉計画」を策定した。